
令和6年度 第3回 (2科目・4科目共通)

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和6年2月5日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生^{あいせ}どうしの貸し借り^{かか}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{もんたいさふ}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は19ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の——線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① バスでウンチンを^{はら}払う。
- ② この人は私のオンシです。
- ③ 事故で交通にシショウが出る。
- ④ あなたの意見にはショウフクしかねます。
- ⑤ 天皇ヘイカの写真が新聞にのる。
- ⑥ 毛糸でセーターをアむ。
- ⑦ 上から水がタれてきた。
- ⑧ 山の頂に登る。
- ⑨ 書類の提出を親に任せる。
- ⑩ 公園にベンチを設ける。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「悪口はどうして悪いの？」と聞かれたとき、もっともシンプルな答えは、「人を傷つけるから」というものでしょう。理由なく人を傷つけることは悪いことで、悪口も、足で蹴るといった身体的暴力と同じように人を傷つけるので、悪口は悪い、という発想です。

殴る、蹴るとは違い、悪口によって、血が出たり、顔がはれたりするわけではありませんが、場合によってはそれと同じくらいか、あるいはそれ以上の精神的なダメージを受けることがあります。結局、苦痛というのは脳の活動によって生み出され、身体の痛みも心の痛みも、似たような脳の働きに由来すると考えられています。身体が痛いことが悪いなら、心が痛いことももちろん悪いわけです。

子どものとき、「そんなこと言われたら傷つくでしょ、嫌な気持ちになるでしょ」と、注意されたことはないでしょうか。あるいは、大きくなってからも、「他者の気持ちになって行動しなさい」と言い聞かされたことはないでしょうか。私たちは人を傷つけることを避けようとしています。

「悪口が悪いのは人を傷つけるから」という考えは、とても常識的ですが、悪口の悪さをそれほどうまく説明できません。まず、悪口以外にも、人を傷つけることば、精神的なダメージを与えてしまう発言がたくさんあります。たとえば、「残念ながら不合格です」「私たち別れよう」のように、自分の期待や希望にそぐわないことを言われてしまうことは、誰にでもあります。そして、それによって、ときには立ち直れないほどに深く傷ついてしまうことすらあるでしょう。しかし、① こうした発言は、もちろん悪口ではありません。 ですので、ことばが人を傷つけるからといって、悪口になるとは限りません。

このポイントを、論理的なことばを使って言いかえてみると、「人を傷つけることは悪口の十分条件ではない」となります。ここで② 十分条件の例をあげておきます。 ある人が自分の卒業証書を受け取っていることは、その人が卒業したことの十分条件です。自分の卒業証書があることが、その人が卒業していることを十分に示しています。一方、出席日数が足りていることは、卒業の十分条件ではありません。たとえば、皆勤賞をもらっていても、卒業するための他の条件を満たしていないかもしれないかもしれません。すべてのテストが0点だと、卒業させてもらえない学校が多いでしょう。

ついでに、必要条件も説明しておきます。一定の出席日数があることは、卒業の十分条件ではありませんが、必要条件です。ある程度は出席することが卒業するために必要なわけです。一方、卒業式に出席することは、卒業するために必要ではありません。風邪をひいて卒業式に出席できなくても、卒業できなくなるわけはありません。卒業式への出席は、卒業の必要条件ではないのです。

また、③人を傷つけることが、悪口の必要条件でないこともすぐに分かります。つまり、人を傷つけなくても悪口になる可能性はあるのです。

言っていることが誰がどう聞いても悪口だが、言われた本人はまったく傷ついていない例を考えることは簡単です。今から架空の例を出してみます。よければ、みなさんも自分の例を考えてみてください。

Aさんは同じ部活の先輩のBさんが大好きだ。でも、AさんはBさんときき合いたいとか、結婚したいとか、そのような願望があるわけではなく、アイドルやミュージシャンのファンのような感覚を持っている。AさんはとにかくBさんに会いたい、できるだけ一緒にいたい、と願っている。

一方、BさんはAさんのことを邪魔だと思っていて、「Aはうざい」「Aはきもい」としよっちゅう周りに伝えている。ときには、「きも。帰れよ」などとAさん本人に向かってさえ言っている。

Aさんはしかし、そのことが気にならない。①、Bさんが自分のことを考えてくれると思うと、嬉しくなる。目を合わせて、「うざい」とか言ってくれるのを楽しみにしている。

Bさんのことばは、シンプルに悪口だと思う人が多いでしょう。しかし、Aさんは、それをまったく気にしていないどころか、①喜んでくれます。②、人を傷つけなくてもことばは悪口になります。

ひよっとしたら、Aさんは傷ついていないので、Bさんの言っていることは悪口ではない、と考える人もいるかもしれません。では、次のような例はどうでしょうか。

人間は、虐待といった強烈なストレスが与えられたとき、自分を守るために身体から心を切り離すことがあります。ぼーっとする、夢の中にいる気がする、自分の体験や感情を覚えていない、感覚が麻痺する、といった状態になります。たとえば、す

ごくいじめられている人が、一種の自己防衛として、何を言われても何も感じなくなってしまうとします。感覚が麻痺しているのだから、その人に何を言っても悪口にはならないのでしょうか。そんなことはないでしょう。たとえば、そこでたまたま傷ついているなかったとしても、痛みも何も感じなかったとしても、悪口は悪口だと私たちは考えます。

むしろ、④人が傷つくかどうかや、不快に思うかどうか、という基準ばかりに焦点を当てることでは不都合も生じます。いじめられている側が、「やめるバカ！」と、多少乱暴なことばを使って、自分の身を守ろうとしたとします。そのとき、そのことばづかいは他人に不快感を与えるからやめましょう、などといじめられている側を注意したとすると、これほど不公平なことはいでしょう。

似たようなことは、より広い社会におけるやりとりのの中にも見られます。女性や黒人といった、差別されている人たちが、差別的な社会の仕組みに対して批判の声をあげたとき、その批判の内容ではなく、ことばづかいや言い方に論点をそらせて、黙らせようとする反応があります。「乱暴な発言なので怖いです」「そんな言い方では誰も協力してくれませんよ」といったものです。そうした行為は、「トーン・ポリシング」(tone policing 口調の取り締まり)と呼ばれています。

ぴしっと厳しく叱られたり、批判されたりしたら、言われた側は、たとえ批判されるだけの十分な理由があると自覚していても、不快に感じたり、居心地が悪くなったりするものです。ことばの悪さが、不快さや痛みのような感覚だけですべて説明されてしまうなら、まっとうな説教ですら悪口になってしまいますが、それはおかしな結論です。

したがって、⑤人を傷つけるから悪口は悪いという発想で、悪口を理解することはできないのです。

悪口がどうして悪いのか説明しようとするもうひとつの常識的考えは、悪意のせいだ、言う側の心の問題だ、というものです。私たちは、誰かを傷つけてやろう、嫌な気分にさせてやろうと思ひ、あるいはその人をバカにして、軽蔑して、悪口を言うことが確かにあります。そして、そのように人の悪意に触れることは、辛くて悲しいことです。悪口が悪いのは、さらには、悪口で傷ついてしまうのは、言う側の悪意が理由だ、という発想です。

悪意を理由にするアイデアも、日常的な感覚に近いですが、あまり役に立ちません。先ほどと同じように、悪意は悪口の必要条件でも十分条件でもありません。

悪意がなくても、悪口を言うことができます。つまり、悪意は悪口の必要条件ではありません。たとえば、子どもの無邪気な

ことばはどうかでしょうか。私も、三歳児さいとか五歳児ごさいといった小さな子どもに、「きらーい」「くさーい」などと言われることがあります。子どもがなぜそんなことを言うかというところ、※からです。子どもたちは、本当に⑥屈託くつたくなく、にこにこそのようなことを言ってきます。遊んでいるだけで、心の底から、楽しい、うきうきとした気分で言うので、悪意と呼べるほどのものはありません。しかし、私はそんなことを言われると嫌なので、「そんなこと言わないで」と言います（やめてくれるわけではありませんが）。

周りのことがよく分かっていない、小さな子どもは別の話で、関係ないだろう、と思われるかもしれませんが、(3)、子どものように無邪気に、あるいは子どものように何も考えずに、悪口を言ってしまう大人もたくさんいることもみんな知っています。たとえば、いじめの加害者の中には、本当に自分がいじめているという自覚がない人がいるでしょう。「うざっ」や「きもっ」などと言うとしても、「いじめ」ではなく「いじっているだけ」、なんだったら喜ばせている、と考えているかもしれません。

そのような場合、発言をする側に悪意はありませんが、私たちは悪口を言っていると考えます。つまり、悪口を言うために悪意を持っている必要はないのです。

いずみゆう（和泉悠）『悪口わるくちってなんだろう』より）

問1 — 線部①「こうした発言」とありますが、これはどのような言葉のことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 相手を傷つけないように配慮して、現実を知らせる言葉。

イ 相手を傷つけようとして、ありのままの現実を知らせる言葉。

ウ 相手を傷つけようとして発したが、結果として相手が傷つかなかった言葉。

エ 相手を傷つけようとして発するわけではないが、結果として相手を傷つけてしまう言葉。

問2 — 線部②「十分条件の例」とありますが、「十分条件の例」として正しいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 人間であることは、動物であることの十分条件である。

イ 涙を流すことは、悲しんでいることの十分条件である。

ウ 早起きすることは、良いことが起きることの十分条件である。

エ 大人であることは、善悪の判断ができることの十分条件である。

問3 — 線部③「人を傷つけることが、悪口の必要条件でない」とありますが、「必要条件でない」ことの例としてまちがっているものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 薄着でいることは、風邪をひくことの必要条件でない。

イ 海に行くことは、夏休みを楽しむことの必要条件でない。

ウ 図書館で勉強することは、成績が向上することの必要条件でない。

エ 野球のルールを知っていることは、プロ野球の審判になることの必要条件でない。

問4 本文中の空らん(1)・(2)・(3)に当てはまる語として最も適切なものを次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(1)	ア だから	イ むしろ	ウ やはり	エ ところが
(2)	ア さらに	イ おそらく	ウ ですのて	エ もつとも
(3)	ア さて	イ しかし	ウ つまり	エ あるいは

問5 —線部④「人が傷つくかどうかや、不快に思うかどうか、という基準ばかりに焦点を当てることで不都合も生じます」とありますが、そう言える理由を筆者はどのように説明していますか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 加害者の方も乱暴な言葉で厳しく批判されれば、たとえ批判されるだけの十分な理由を自覚していても不快感を抱くのは事実であつて、加害者の人権が侵害しんがいされてしまうから。

イ 被害者が自己防衛のために使う多少乱暴な言葉に対してその不快感だけを取り上げて「悪口」としてしまうと、被害者が加害者になるというおかしなことが生じてしまうから。

ウ 被害者が傷ついているかや不快に思っているかばかりに注目が集まってしまうが、加害者の発言に「悪意」があったかどうかも被害の程度を判断する基準にふくめないと不公平であるから。

エ 被害者が自己防衛のために感覚を麻痺まひさせることもあるため、相手が傷ついているかや不快に思っているかを基準に被害の有無うむを判断していると、救済すべき被害者を見のがしてしまうことになるから。

問6 ―線部⑤「人を傷つけるから悪口は悪いという発想で、悪口を理解することはできないのです」とありますが、そう言

える理由を筆者はどのように説明していますか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 人が傷つくかどうかという判断基準では、相手の人格を否定するような厳しい説教も悪口になってしまふから。

イ 人を傷つける言葉が悪口だという考え方では、人が傷ついていなければ何を言ってもよいということになってしまふから。

ウ 人が傷ついていなくても悪口であると判断されることがあるし、人が傷ついていても悪口でないと判断されることもあるから。

エ 言葉の不快感や痛みのようなものだけで悪口かどうか判断されると、人によって感じ方が異なるため、同じ言葉が悪口になったりならなかったりしてしまうから。

問7 本文中の空らん ※ に当てはまる語句として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 言われた私の反応が面白い

イ 私をからかうことで大人ぶりたい

ウ どうしても本音を隠すことができない

エ 本当のことを言われた私の様子をうかがっている

問8 — 線部⑥「くつたく屈託なく」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア わがままでう浮かれているさま。
- イ 心配ごごとがなくさっぱりしているさま。
- ウ 相手の立場を考えず自分勝手にふるまうさま。
- エ 先のことを考えず今だけを楽しんでるさま。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「中溝早希」「御木元玲」「原千夏」は明泉女子高校の二年生。「中溝早希」は中学生の時にソフトボール部の四番打者でエースだったが、中学三年生の最後の試合で肩を壊し、ソフトボールの強豪校に推薦が決まっていたのを辞退して明泉女子高校に入学した。なお、「コリエ」「史香」はクラスメート、「ボーズ」は古典の教師、「浅原」はクラス担任で音楽の教師である。

どうして御木元玲にむかつかなくちゃならないのか自分でもわからない。わざわざ目の敵にするほどの子ではない。それほど関わりのある子じゃないし、それほど嫌な子でもない、はずだ。人に歩み寄ろうという姿勢のない、鈍感で、幼くて、(注1)傲慢で、気取ってて、(注2) いけすかないやつではあるけれど。

母親は有名なヴァイオリニストだそうで、御木元響？ それ誰？ と聞いた私は(注3) 失笑を買った。自分でいうのもなんだけど、私にはおかしいほど一般教養みたいなものがない。朝から晩まで白球を握っていて、そんなものを身につける暇——といたら怒られそうだけど——がなかった。

彼女はきつと父親が外国人なんだろうと思わせる(注4) エキゾチックな顔立ちをして、長い黒髪を後ろでひとつに束ね、つねに不機嫌な顔をしている。ほとんど喋らず、笑いもせず、いつも独りである。私がむかつこうがどうしようがきつと気にもしていないだろう。

ただ、①合唱コンクールで何かが変わった。指揮に指名されて彼女は初めてこちらを振り返った。同じクラスになって半年余り経ったあのときになってようやくその目にクラスメイトの顔が映ったみたいだった。私も、彼女の不機嫌じゃない顔を初めて見た気がする。不機嫌ではなく——なんというか、ぐるぐるとかがつがつか、そういういろんな感情をむきだしにしたような、生々しい顔だった。

「……：そうか」

コリエが私を見て、ちよつと首を傾げる。

「早希、ヘン。何ひとりで納得なっとくしてるの、むかついたのはどうしたのよ」

「なんとなく、むかつく理由がわかった気がする」

「あたしにはわかんないよそれじゃ」

私にもよくはわからない。

なんでこんなことをやってるんだろ。そう思ったけれど、ついつい足が向いてしまった。② 気づくと私は音楽室の前で息を殺していた。

ひとつには、グラウンドを避さけたいという気持ちもあった。いつのまにかソフトボール部を見ていたなんて、さらにそれをボーズなんかに見破られていたかもしれないなんて、ほんとにかっこわるい。寄っていかないと誘さそわれて、それをまるで気にしないかのようにグラウンドの脇わきを通って帰るのはむずかしそうだった。無視して通り過ぎることならできる。だけど、ボーズに、おーい、と声をかけられたら、昼間みたいにもうキにならずに断ることができようか。スポーツに興味はありませんと穏おだやかに笑って話せる自信はあまりなかった。

だからといって音楽室に来る理由にはならない。

千夏、だろうか。それもある。千夏が A おおずおおずと、でも明らかに胸を弾はずませて紙袋かみぶくろから出して見せた肌色のテキストが、目に焼きついてる。それを使って何が行われるのか、ひとりの同級生をあんふうに夢中にさせるのは何なのか、見てみたい。そう思ったのはほんとうだ——わかってた。わざわざ音楽室を覗のぞくようなことをしているのは御木元玲のせいに違ちがいなかった。千夏を音楽室に引き寄せているのも彼女だ。私の中でぐるぐるが渦うずを巻いている。御木元玲の正体をこの目で見たい。その欲求を抑おさえられなかった。

音楽室の中からは何も聞こえてこなかった。合唱部の練習が講堂で行われる水曜日に、浅原の許可を得て音楽室を使わせてもらっている、と千夏は史香に話していたそう。そして今日、放課後に千夏が B いそいそと音楽室のほうへ向かうのを見た。この中にいるのは確かなはずだった。何をしているのだろう。どうして何も聞こえないのだろう。

そう思ってもう一步ドアに近づいたときだった。内側から、すっとドアが開いた。

あれ、と声がした。驚いたような顔の千夏が立っている。

「どうしたの」

先に私が聞いた。千夏のほうこそ余程そう聞きたかったことだろう。

「今、練習始めようと思ったらこっちで物音がしたから、誰か来たのかなと思って。吹奏楽の子とかときどき楽器取りに来たりするから」

「そんなんでいちいちドア開けに来るの。もっと堂々としていればいいじゃない」

「あ、そうだね、ごめん」

なぜか千夏が謝っている。私の態度がそれだけ偉そうだということだろう。偉そうついでにいった。

「練習、見ていってもいい？」

千夏はピアノのほうを振り返った。そこで私は千夏以外にも人がいたのかと初めて気がついたふうに顔を向けた。御木元玲はピアノの前の椅子にすわっていた。彼女は立ち上がり、そのまままっすぐ私の前まで歩いてきた。

「見ていだけじゃなくて、一緒に歌っていけばいいのに」

べ、と私は口籠もった。べつに、歌いたいわけじゃない。でも、べ、しかいえずに口を噤んだ。御木元玲の口調はあまりにも自然だった。

何もいえずに立っていると、彼女はまたピアノのところへ戻っていく。千夏が弾むような足取りで後を追った。どうしようかと思っっているうちに、ピアノが鳴り始めた。これが、コールユーなんかかだろうか。ドアを閉め、ゆつくりとピアノのほうへ近づいた。聞いたことのある曲だと耳を傾けていると、やがて千夏が歌い出した。のびのびと楽しそうに。どんな名曲かと思えば、うちの校歌じゃないか。へえ、と思う。退屈な歌だと思っていたけど、こうして聴くと案外いい。

校歌を歌うことがどんな勉強になるのか知らない。御木元玲は千夏の歌いたいように歌わせて、自分は流暢にピアノを弾いているだけだ。それなのに、ちよつと楽しそうだった。千夏のあるまじうまくない歌が私を誘う。なんとなく私まで歌い出したくなる感じなのだ。

やがて歌が終わると御木元玲のピアノも鳴りやんだ。校歌の余韻が音楽室に残っている。

「私、歌を歌おうにも楽譜がくふも読めないから。声の出し方も知らないし。そしたら御木元さんが、まずは好きな歌を歌おうって」
千夏が小声で説明してくれる。

「それで校歌？」

「うん。この学校に来てよかったな、って思うから」

そうか。そんな人もいるのか。この特に取り柄えのないような学校に来てよかったと愛着を感じる人を間近に見て、驚くと同時に④ちよつと恥はずかしくなった。成り行きで入っただけだから、もう余生だから、学校は適当に出ておけばいいと思っていた。

「週に一度、御木元さんに教えてもらって、あとは自分でなんとか——」

「教えてないよ」

御木元玲がきっぱりという。

「伴奏ばんそうするだけ。ときどき一緒に歌うだけ」

「でもそれだけですつごく歌いやすくなるんだ」

千夏が熱っぽく語るのを、質問で遮さへぎった。

「あとは自分でなんとか、どうするつもりなの」

「だからさ、自分でも練習して、もしちゃんと歌えるようになったら、合唱部に入ろうかなって」

照れくさそうに千夏はちよつと俯うつむいた。おいおい。声に出しそうになって危あやうく言葉を飲み込むこむ。ずいぶん小さい目標じゃないの。しかももう二年の冬だっというのに今から入部するつもりなのか、このおめでたい同級生は。

あきれているはずなのに、⑤胸むねがじんとしている。千夏の素直すなおなパワーはどこから来るんだろう。もしかして、この子にはぐるぐるはないんだろうか。いや、と私はブレーキを踏ふむ。たぶん、ぐるぐるのない人なんていない。それを忘れちゃいけない。ぐるぐるぐるぐる、きつと悩なやんでいる。楽譜が読めないというのがほんとうだとしたら、ずいぶん勇気が要いったことだろう。同級生に初歩から歌を習うなんて。これから合唱部に入ろうなんて。そういう気持ち、すごいと思う。余生じゃないんだ。

今も現役げんえきでぐるぐるどろどろがつがつしている人が、なんだか光って見える。自分は降りてしまったはずなのに、そういう人の匂においを嗅かぎ分けてはむかついていた。

認めなくてはいけない。余生ではない、本道を生きている人に嫉妬しつとしていたことを。

「歌ってくれてありがとう」

ピアノの前にすわったまま、不意に御木元玲がいった。

「あ、ごめん、歌ってなかった。聴いてた」

「違う、マラソン大会のとき。ゴール前で、クラスの人たちが私を励はげましたために歌ってくれたでしょう」

そうだった。そんなことがあった。七キロ弱のマラソンにあまりにも苦戦する御木元玲を励はげまそうと、トラックを走る彼女の脇でたぶん千夏か誰かが合唱コンクールの曲を歌い始めた。そこに三々五々、声が集まった。とつくに走り終えて芝生しばふにすわっていた私も、史香とコリエが立つのにつられて立ち上がった。しかたがないな、まあ歌ってやってもいいかな、くらしいの気持ちだった。積極的に歌ったわけではない。たまたま居合わせただけだ。

「あの合唱団の中に中溝さんがいるのを見つけて、なんだか目の前が開けた感じがした。やらなくちゃいけないことっていうか、やりたいことっていうか、そういうのが見えてきた気がした」

それって、誤解だ。ろくに練習にも参加せず、偉おうえんそうなことばかりいつていた私が急に応援する側にまわったものだから、この子は素直にうれしかったのだろう。⑥ 案外かわいいのかもしれない。

「それで、何だったの、御木元さんのやりたいことって」

黒い瞳ひとみが一瞬いつしゆん、揺れた。それからほのかな笑えみが浮かぶ。まさか、歌でみんなの心をひとつにするのが夢だとかはいわないでほしい。返答に困るから。

「楽しく生きること」

「は？」

「そのために、音楽があるんだ。ええと、⑦ 音楽は目的じゃなくて手段だったってこと、かな」

⑧ ふうん、と私はいった。

歩み寄りかけた御木元玲が、また遠ざかっていくのを感じた。

楽しく生きるって、今の私には思いもつかない。やりたいことも、やるべきことも、もう手に入らない場合はどうしたらいい

んだらう。

(宮下奈都『よろこびの歌』より)

(注1) 傲慢ごうまん || おごり高ぶつて人を見下すこと。

(注2) いけすかない || 非常に気にくわない。

(注3) 失笑しっしやうを買った || おろかな言動のために笑われた。

(注4) エキゾチック || 異国の情緒じやうちよや秀囲気ふんいきのあるさま。

問1 ——線部A「おずおずと」・——線部B「いそいそと」の意味として最も適切なものを後の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

A 「おずおずと」

ア 警戒けいかいするさま

イ あいまいなさま

ウ 敬意をはらうさま

エ ためらいがちなさま

B 「いそいそと」

ア 心が浮うき立つさま

イ 時間を惜おしんで動くさま

ウ 忙いそしそうにふるまうさま

エ 他のことが見えていないさま

問2 ——線部①「合唱コンクールで何かが変わった」とありますが、どのような変化があったのですか。その説明として最も

適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア それまでいつも気取った顔をして感情を見せなかった御木元玲みきもとれいが、クラスメイトの前で不機嫌ふきげんな感情をむき出しにした顔をするようになったという変化。

イ それまでいつも独りでいて他者のことを気にしていなかった御木元玲が、指揮者になることによってクラスメイトと向き合うようになったという変化。

ウ それまで人に歩み寄ろうという姿勢がなかった御木元玲が、指揮者になって初めてこれまでの自分のあり方がよくなかったと反省するようになったという変化。

エ それまで「私」がむかつこうが気にしていなかった御木元玲が、合唱コンクールを通してクラスメイトがどのような感情でいるのかを気にするようになったという変化。

問3 — 線部②「気づくと私は音楽室の前で息を殺していた。」とありますが、「私」が音楽室に来た最も大きな理由は何ですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

問4 — 線部③「私は千夏ちなつ以外にも人がいたのかと初めて気がついたふうに顔を向けた」とありますが、なぜ「私」は「初めて気がついたふう」にしたのですか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 友人に会いたいのではなく、本当は御木元玲にひかれているということを悟さとられたくなかったから。

イ 御木元玲にひかれていただけでなく、彼女と友だちになりたいという本音を悟さとられたくなかったから。

ウ いきなり御木元玲に近づいて、逆に嫌きらわれてしまわないかと恐おそれる気持ちを悟さとられたくなかったから。

エ ヴァイオリニストの娘むすめである御木元玲のピアノの腕うでがどれほどのものか知りたい気持ちを悟さとられたくなかったから。

問5 — 線部④「ちよっと恥はずかしくなった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア この学校の良さを何とか見つけ出そうと考えている千夏と比べて、自分は色々な現実を否定的にとらえることしかできず、人間的に劣おとっていると思ったから。

イ 学校生活に前向きに取り組んでもらおうと千夏に校歌をすすめた御木元玲と比べて、自分はいつまでたっても現実を直視することができず、逃にげてばかりいたから。

ウ この学校に入学してよかったと考えている千夏と比べて、自分はこの学校のことを何の取り柄えもないものとしか思えず、適当に過かぎとして卒業しようと考えていたから。

エ なやみを抱かかえながらも合唱コンクールに前向きに取り組む千夏と御木元玲と比べて、自分はいつまでたってもソフトボールをもう一度やりたいという思いを断たち切れずにいたから。

問6 — 線部⑤「胸がじんとしている」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア むだなことだとわかっていながら努力する千夏をけなげに感じたから。

イ 何のなやみごとにもなさそうな千夏の無邪むじやき気さをほほえましく感じたから。

ウ 自分から難しい道を選んだ千夏の姿勢に純粋じゆんすいさと力強さを感じたから。

エ 御木元玲が何も教えてくれないのに、必死に練習する千夏をかわいそうに感じたから。

問7 — 線部⑥「案外かわいいのかもかもしれない」とありますが、「私」はなぜこのように思ったのですか。その理由を五十字以上六十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

問8 — 線部⑦「音楽は目的じゃなくて手段だった」とありますが、これはどのようなことを意味していますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 音楽という手段で楽しく生きるためには、目的を誤ってはいけないということ。

イ 楽しく生きるという目的を達成するために、音楽という手段があるということ。

ウ 音楽という手段を目的にするためには、楽しく生きていないといけないということ。

エ 楽しく生きるという目的を達成するための手段は、音楽だけしかないのだということ。

問9 — 線部⑧「ふうん、と私はいった」とありますが、御木元玲の返答を聞いた「私」は、ここでどのような気持ちになっ

ていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 御木元玲がやりたいと言ったことが自分には理解不能であったため、御木元玲の思考や発想に自分との距離きょりを感じ、泣きたい気持ちになっている。

イ 御木元玲がやりたいと言ったことが自分の予想していた返答とはまったく異なっていたため、おどろきを隠かくせなくなり、困惑こんわくした気持ちになっている。

ウ 御木元玲がやりたいと言ったことが自分のやりたいこととはまったく異なっていたため、御木元玲と仲良くなることは難むづかしそうだと思い、冷淡れいたんな気持ちになっている。

エ 御木元玲がやりたいと言ったことが自分には望んでもできそうにないことだったため、御木元玲のような考え方に自分
はなることができないと感じ、さびしい気持ちになっている。

(お わ り)

